



原始

力は

世界を救う。



日本原始力発電協会
<http://eco-powerplant.com/>
会長 石蔵文信さん

自転車をこいで発電し、その電力で鉄道模型を走らせる石蔵さん。速く漕ぐと電車のスピードも速くなるので盛り上がる。



これから、ゲンシリョク発電所をつくる！ そんなふうに明言したら、途方もない愚行か冗談としか受け取られないだろう。しかし、ここに大真面目にそれを実践しようとしている人がいる。ただし、「原子」ではない、「原始」だ。人間の体を使ったプリミティブな力による自転車発電。なんだ、自転車か、と侮るなかれ。そこには、これまで誰も考えなかった長期的かつ総合的なビジョンとアイデア、ユーモアがかくされていた。

時間のある高齢者を活用して 新発想の発電システムを

東大阪市にある大阪樟蔭女子大学を訪ねる。同大学学芸学部健康栄養学科の石蔵文信教授に、自転車発電の様子を見せてもらうためだ。女子大だから当然なのだが、すれ違うのは女性ばかり。本当にここで「発電」しているのだろうか？ という雰囲気だ。

「健康の側面から自転車発電を卒論に選んだ学生もいます。何ワットの電力を生み出すのに、いったい何カロリー消費しているか。自転車をこいだ人の吐いた息を分析すると、スマホをだいたい1%充電するのに10~15カロリー使っています。つまり、10~20%充電しようとする、あんばい1個分くらいは消費している計算になります」

自転車のライトは自分がこぐことによって電気を生み出しているのだから、自転車で発電ができることは誰でも知っている。しかし、それを組織化し、拡大し、超高齢社会、さらには3.11後の日本社会と大きく結び付けようという発想はこれまでなかった。

「コンロのような、熱量が要るものは自転車では無理です。しかし、スマホやPCといったIT系の機器、LED、ちょっとした医療機器などは少ない電力でも可能です。3.11のあの経験を受けて、私は街のいたる所に自転車発電による発電ステーションを作るべきだと考えました。ちょっとした空き時間に自分で自転車をこげばスマホの充電ができ、災害時には拠点にもなります」

この発想をさらに、高齢者対策と結びつけた点が石蔵さんの独創だ。

「60歳以上の人口は今、この国に3500万人います。まだまだ元気なのに、毎日特にやることもなくブラブラしている方がとても多いですね。特に男性。女性はいろいろ

な趣味を見つけたり、仲間を作ったりするのが得意ですが、組織や肩書きを失った定年後の男性は孤立しています。もったいない。時間だけはふんだんにあるこうした高齢者の方にどんどん自転車をこいでいただいて、活動に参加してもらいます。適度にやればとても良い運動になるし、メタボ対策にもなります。社会貢献もできるんです」

医師？ 夫婦関係？ 料理教室？ 石蔵文信さんの多彩な活動

こんなユニークなことを考える石蔵さんとは、果たしてどんな人物なのだろう。第一に、医師であること。専門は循環器だ。更年期外来を務め、夫婦や男女間の関係についてもアドバイザーとして活躍している。夫が原因で妻が病気になるという「夫源病」の概念を提出し、話題になった。と思うと、なかなか外に出て学びたがらない男性を引っ張り出し、男性のための料理教室を実践している。いった



石蔵文信 いしくらふみのぶ

1955年生まれ。医師。大阪樟蔭女子大学学芸学部教授。日本原始力発電所協会会長。男性の更年期外来、ITを利用した遠隔診療の研究、自殺者を減らす活動、夫婦間問題の講演やアドバイザー、男性のための料理教室など多彩な活動を展開している。『妻の病気の9割は夫がつくる』『男のええ加減料理』『なぜ妻は、夫のやることなすこと気に食わないのか』など、著作多数。



い何の専門家? と聞きたくなるような多彩さだが、よく見ると一貫しているのは、高齢者、特に高齢男性が今後の人生をいかに充実して生きていくことができるのかをテーマにしていることがわかる。

「講演会などに行っても女性同士はすぐ集まって、よくしゃべるし、まあ元気です。ところが高齢の男性は他人とコミュニケーションをするのが苦手で、おまけに家庭ではジャマ者扱い(笑)。行き場がなくて公園あたりでブラブラしている人を見ると悲しくなります。しかし、図書館やジムに行くと、男性はけっこういるんですね。つまり、知的欲求がまだまだあり、体も元気。これは実にもったいないとかねてから思っていました」

定年を迎えるまでは誇りを持って仕事をこなしてきたのが、急に階段を外されたようにその仕事も肩書きも消えてしまった。しかし、まだ何か自分が役に立てることがあるはずだ。そんな男性たちのプライドや思いに、石蔵さんは方向性を与えようとしている。

「街の発電ステーションで交代で自転車をこいだり、途中で昼食を食べに行くとかお茶を飲みに行くとか、そんなゆるやかな場所がいいんです。下校時間が近づいたら道路

に出て、子供たちの見守りもできる。地域活性にも一役買うことができるんじゃないでしょうか」

節電ばかりでなく 医療費削減やメタボ対策にも

発電量が多い改造型の自転車にはLED電球と白熱灯が並んで取り付けられ、発電の違いを経験できる。LEDは漕ぎ始めると軽く点灯するが、白熱灯はかなり頑張らないと点灯しない。LEDがいかに省電力かを身をもって体感できる。さらにメタボの社員が発電しながらパソコンで仕事できる“スマート机：樟蔭1号”を同大学の手島教授と開発した。

自転車で発電することが全国規模で実現すれば、その効力は計りしれないと石蔵さんは話す。

「メタボ対策なんていわれていますが、実際の受診率は非常に低いですね。10年後、20年後に襲ってくるかもしれない病気を予防しようというかなり気の長い話ですから、なかなか皆さん、重い腰を上げない。しかし朝昼晩30分ずつ自転車をこぐことで、カロリーを消費し、ほどよく疲れて、ぐっすり眠れます。食欲も出る。結果、医療費削減につながります。日本の医療費35兆のうち15~20兆は高齢者ですから、そのうち1, 2兆、あるいは5兆くらい節約できるかもしれません。ちなみに現在、日本の天然ガス輸入量は震災時より約3兆円増加しています。」

発想の原点は、そもそもジムにあるトレーニングマシンに疑問を感じたことだ。

「あれ、1台あたり30~40ワット使うんです。健康になるために電気を使っているんだけど、なんかおかしいと思いませんか? だって、電気を自分で作りながら同時に健康になれるんですよ。ぼくらが今使っているものマシンは30~40ワット生み出します。マイナス30をプラス30にできる。3500万人いる60歳以上の人口のうち、仮に1割の350万人が自転車をこいだとして、発電量は20万キロワット、これ、中規模の火力発電所1日分に相当します」

具体的な数字を出して考えていくと、あながち夢物語とはいえない構想が広がっていくのだ。



自転車発電と健康の関連性を、卒論にする学生も。
開発したスマート机：樟蔭1号を前に談笑。

2020年東京オリンピックで 世界に向けて発信

街のいたる所に「原始」力発電ステーションを作る。それを拡大していくために必要なこととしてインセンティブがあるという。

「ポイント制を導入することが大事だと思います。発電に協力した人はその街の居酒屋で1杯無料になるとか(笑)、そういう素朴な試みから始めて、携帯ショップに置けばそのままポイントは端末からデータ集積されますよね。空港に置いてマイレージに換算してもいい。そうやってインセンティブをつけながら、みんなで社会意識を高め、大きな輪にしていくことが大切だと思います。

自転車メーカーや健康機器メーカーから申し出があり、試作機の開発は着々と進んでいる。また実際、とある空港での導入も交渉中だという。

「市役所、駅、公園、学校など、人が集まる場所がいいですね。1台あたり3万円くらいの費用ですから、一般家庭でも、個人商店でもできます。公園で子供たちが自転車で遊んで、その力で暗くなったら街灯が点くなんて、いいじゃないですか。スマホというのはすぐ充電が切れるものですが、その弱点を逆手に取って、『ちょっと時間あるからあそこで少しこいで充電していこう』という行動が日常的に行なわれるようになるといいと思います。

石蔵さんの視線はいま、2020年に向かっている。東京オリンピックが開催されるタイミングだ。

「世界中のアスリートが、観客が、東京へ、日本へやってきます。その時、『日本人は高齢者も子供たちも、みんな街のいたるところで日常的に自家発電している。それがデフォルトになっている。すばらしい!』というメッセージを世界中に発信してもらえる絶好のチャンスです。そこでステージがまたグッと上がり、自転車発電が世界に伝播されれば最高です」

日本原始力発電協会は任意団体であり、ビジネス化するつもりはないという。

「空港などに導入されても、ぼくらのところには1円も入ってきません。それでいいんです。興味を持って開発してくれ

向かって左がLED電球、右が白熱灯。LEDは漕ぎはじめてすぐに点灯するが、白熱灯はなかなか点かない。



ている方々には、リスクもベネフィットも、すべてそちらで考えてやっていただく。その代わり、宣伝をはじめ、協力は惜しみません。電力は自分たちで生み出すという発想が芽生え、同時に高齢者の健康促進と社会参加が実現できればそれでいい。利益は出ませんが、1千万人くらいの会社にしてもいいですね。それで皆さんには、第30発電所営業部長とか、好きな肩書きをつけてもらう(笑)。そのうちワッペンでも作って、『ああ、あのおっちゃんも原始力発電所の人やな』とわかるようにしたい。その際は、ワッペンの販売くらい、させてもらいましょうか(笑)」

夢ではあるが、絵に描いた餅ではなく、十分に実現可能なアイデアである。2020年には果たしてどこまで進んでいるだろうか。その際は、ぜひまた再取材したい。

Text by : 北條一浩